

コースの「一部」で使う文学教材

Pygmalion を用いた英語授業の実践から

久世 恭子

1. はじめに

第二言語・外国語教育における文学教材は、1980年前後に主に英米で再評価されて以来、言語、感情や人間的成長、文化など観点からその意義が議論されてきたが、その後、主張を裏付ける実証的なデータの収集が急務とされるようになった。特に、Paran (2008) が主張するように、教室における多くの実践データの記述と報告が求められている。本発表では、文学的テキストを主教材としない大学英語コースの中で、限定的に複数回文学的な教材を使用する授業を研究対象とし、その実践方法と学習者の反応の分析から、コースの一部で使う文学教材の意義や役割を探る。

2. 研究の背景

1学期のコースの全体ではなく、部分的に文学教材を使用する場合、その理由はいくつか考えられる。まず、教養科目や基盤教育科目の英語授業で、英米文学専攻以外の学生に教材として文学を用いるのは多くの場合難しいという現実である。現在、多くの大学学部ではTOEICの対策や実用的なコミュニケーションを重視した英語教育がなされており、学生の専攻や将来の職業に合った English for Specific Purposes (ESP) もますます重要視されている。そのような状況で、全面的に文学を用いることが難しければ、「せめて」コースの一部で用いようということになる。消極的理由と呼べるかもしれない。

これに対して、同じようにコースの一部で使う場合でも、文学以外、たとえば情報収集を目的としたテキストを主教材としたコースにおいて、「あえて」文学テキストを限定的に加えるということもあるだろう。主教材と内容的に関連する文学テキストを用いて受講生の理解を促したいと期待する場合もあれば、文学教材の特徴を生かして単発的な活動を授業に取り入れたいと意図する場合もある。いわば積極的な理由である。

これら2つの理由は共に存在するというものもあるかもしれないし、途中で入れ替わることもあるだろうが、本発表で扱う事例は、当初やや消極的な理由で始めたコースの「一部」での文学利用が、次第に「一部」で使うからこそその意味を見出して行われた例である。

3. 事例研究の概要

本発表では、首都圏にある大学で発表者が2018年度に担当した教養科目としての英語授業を対象とする。受講生は全員1年生で30名であり、文系理系の学生である。主教材はBauer & Trudgill (eds.), *Language Myths* で、これは言語に関する21の神話(伝説)について言語学者たちが専門知識を用いて一般の人向けに解説し議論する、論説文の投稿集である。全13回(105分)のコースのうち、3回だけを使って、George Bernard Shaw, *Pygmalion* 原作の読解とそれに基づいた映画、*Pygmalion*, *My Fair Lady* の視聴を行い、内容理解の問題や creative writing の言語活動を行った。

4. 授業展開

対象授業の直前の授業で、主教材の中の Myth 20: Everyone Has an Accent Except Me を読み、英語圏におけるアクセントの基礎知識と関心を受講生に持ってもらった。また、Myth 20の章末には、*Pygmalion* を読むこと、あるいは映画 *My Fair Lady* を観ることが強く推奨されており、今回の授業実践の自然な導入を可能にした。以下は3回の授業の具体的な内容である。

授業1	授業2	授業3
宿題：Act I 抜粋の読解と「問題」*	宿題：Act III, V 抜粋の読解	宿題：Creative writing (sequel)
1. 作品と映画の解説 2. DVD 視聴** (抜粋の前まで) 3. グループ活動：ACT I 抜粋を役に分かれて音読し、その後台詞を日本語で言う	1. DVD 視聴 (抜粋の前まで) 2. グループ活動：Act III の音読、日本語訳 3. DVD 視聴 (ACT III 抜粋～ACT V 抜粋の前まで)	1. Sequel の読み合わせ (グループ、クラス) 2. Shaw の人生と活動について解説 3. DVD 視聴 (ACT V 最終場面)、グループ活動

4. 「問題」の答え合わせ（グループ、クラス） 5. DVD 視聴（ACT I 抜粋から ACT III 抜粋の前まで）	4. グループ活動：Act V の音読 5. DVD 視聴（ACT V 抜粋） 6. Creative writing の説明（Guidelines, 評価）***	4. Pygmalion (1916) との ending の違いと sequel の解説 (なぜ Shaw は ending を書き換え、sequel を加えたのか、ここに見られる文学作品の特徴とはどのようなものか、クラス全体で議論)
---	--	---

* 「問題」は、Act I の抜粋箇所について発表者が作成した内容理解のための問題 7 題。

** DVD 視聴は、重要な場面については Pygmalion, My Fair Lady の両方の映画を使用。

***Creative writing の guidelines は、Carter (2010), Hess (2006) を参照して作成。

上記の表の下線部分で示したように、この授業の最終的なねらいは、単に原作を読み映画を観ることではなく、各自が自分の理解と解釈に基づいて sequel を書き、さらに、作者の Shaw 自身の sequel を読むことによって、なぜ、彼がそれを書かなければならなかったのかを理解し、そこに文学的テキストの特徴を感じることにある。文学テキストは、主教材の論説的な文章とは違い、ある範囲内とはいえ読み手に解釈の自由を与える。そのため、時には作者の意図とも異なる受け取られ方がされることもあるが、読者の側から見れば、解釈にいくつもの可能性があることになる。この授業は、受講生それぞれが sequel を書くことで、必ずしも 1 つの決まった答えを持たない課題に取り組み、さらに異なる考えを持つ他者の存在を認める機会を得られるようにデザインされた。

5. アンケート調査の結果

はじめに、アンケートの結果を項目別に提示する。

(1) 全体の印象について

「Language Myths を主教材とする授業に Pygmalion/My Fair Lady を取り入れたことについて、全体的にどう思いましたか。」(理由は選択式で複数回答可、2 回答以上のもののみ提示。カッコ内は回答数を示す。) n=30

良かった	まあ良かった	どちらとも 言えない	あまり 良くなかった	良くなかった
18	8	3	1	0
教養が身についた (16)		興味がわかなかった (3)		
解釈の多様性を学ぶことができた (13)		難しすぎた (2)		
主教材の内容を具体的に理解することができた (12)		英語力の伸長に役立つとは思えない (2)		
英語圏文化の理解に役立った (12)				

(2) 各活動全体の印象について

「それぞれの活動についてどう思いましたか。」(理由は選択式で複数回答可、6 回答以上のもののみ提示。) n=30

	良かった	まあ 良かった	あまり良く なかった	良く なかった	理由
Pygmalion 読解	8	17	4	1	異なるテキスト形式に触れられた(16) 難しすぎた(6)
DVD 視聴	18	9	2	1	アクセントの具体的なイメージを持つことができた(22)/文化理解に役立った(6)
Sequel の writing	6	19	4	0 (無回答 1)	他者の解釈や考えを聞いて良かった (9) 作品理解につながった(8) 普段あまりしない活動だから(6)

(3) 主教材と比較して感じたテキストの違い (自由記述) (LM=Language Myth, P=Pygmalion)

解釈に関 すること	<ul style="list-style-type: none"> ➢ P には解釈の多様性がある (7) ➢ LM はすべて説明してくれるのに対し、P は台詞やあらすじから筆者のメッセージを読者自身が読み取らなければならない。 ➢ P は個人の想像に任されている ➢ LM にははっきりした主張があるが、P は考えられる内容だった (イギリス英語についてなど)
--------------	--

言語表現 に関して	<ul style="list-style-type: none"> ➤ Pは口語表現、話し言葉、慣用句が多く、難しかった (10) ➤ 英語独特の節回しを知れて面白かった (2) ➤ Pには会話ならではの行間を読む難しさがある ➤ 勉強になった
その他	<ul style="list-style-type: none"> ➤ Pを通して具体的にアクセント等の言語の特色を感じることができた ➤ ささいな言葉づかいで人生が変わり得るのは興味深い ➤ Pは言語による格差が存在する好例 ➤ Lは学問的考察・研究、Pはそれがわかりやすく見てとれる例

6. 考察

まず、授業のデザインについて、本事例の場合は主教材と内容的な結び付きが強い文学作品を利用できたのは幸運であったが、一般的には、作品選択、実践方法、時間配分などに十分な注意が払われるべきである。

コースの一部で文学作品や映画を使うことの利点として、本事例を通して観察できたことは主に2点ある。1つは、主教材の内容に関連した文学作品を取り入れることにより主教材で読んだ内容の理解が深まることである。この作品の場合、戯曲や映画の中でアクセント矯正の具体例を読む／観ることによって、主教材の言語的な説明を理解できたわけであるが、逆に、戯曲や映画だけではアクセントについて学術的に学ぶことはできないことを考えると、主教材と文学テキストは相互補完的に使用できると言える。

また、2点目は、性質の異なるテキストを使うことで幅広い言語活動が可能となるという点である。主教材では、文字通り正確に内容を読み取り要約する練習をし、*Pygmalion* では音読、精読、writing、映画で listening の練習をした。特に、sequel を書く creative writing の活動では、writing のために深い読みが要求された。ただし、この活動が writing 能力そのものを伸ばすことに役立ったかどうかは断定できない。

さらに、文学教材使用の意義として、たとえコースの一部で使用されただけであっても、受講生たちは決まった答えのない課題に取り組み、解釈の多様性、自由さを実感することができた。また、作者やクラスメートの考えを知ることにより、異なるいくつもの考え方が存在することを認識できたと言える。

3回の授業に対する学生の反応は、全体的に肯定的で、上記の観察を裏付けるものであった。予想通り、DVD視聴に対しては「良かった」という回答が多く、原書の読解と writing は「難しかった」という声が多かった。また、writing の評価について、英語の授業で creativity を評価されるのは適切であるかという疑問も寄せられた。

7. おわりに

従来、英語教育における文学テキストについては使用が可能か、あるいは適切かという観点から議論されることが多かったが、本発表ではコースの「一部」で利用する事例を議論した。その中で、文学作品は主教材の内容を補完し言語活動の幅を広げるために活用できることを示したが、同時に、たとえコースの「一部」で用いた場合でも、答えのない課題への取り組みや解釈の多様性への気づきを促すという文学教材の特徴を活かした授業展開が可能であることを提示できたと考えている。

註

1) 映画の使い方については、Paran and Robinson (2016), Chapter 8 を参照した。

参考文献

- Bauer, L. & Trudgill, P. (Eds.) (1998). *Language myths*. London: Penguin.
- Carter, R. (2010). Issues in pedagogical stylistics: A coda. *Language and literature* 19 (1): 115-121.
- Hess, N. (2006) 'The short story: Integrating language skills through the parallel life approach', in A. Paran (ed.) *Literature in language teaching and learning*, pp. 27-43. Alexandria, VA: Teachers of English to Speakers of Other Languages, Inc.
- Paran, A. (2008). The role of literature in instructed foreign language learning and teaching: An evidence-based survey. *Language Teaching* 41 (4): 465-496.
- Paran, A and Robinson, P. (2016). *Literature: Into the classroom*: Oxford: Oxford University Press.
- Shaw, B. (1912/1916). *Pygmalion*. London: Penguin.